

---

**あたしは十八で死にますが、なんの悔いもありません...って、んなわけあるか！！！！**

不知火 暁

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

あたしは十八で死にますが、なんの悔いもありません…って、んなわけあるか!!!

### 【Nコード】

N7971R

### 【作者名】

不知火 暁

### 【あらすじ】

幼い頃から占い師のお母さんに言われ続けていたのは「貴方は十八歳で死にます」!?

今までいろいろやってきたけど、あたしの命あと一年じゃん!?

あと一年どう過ごそうか…。

とりあえずぱんだをいじって遊ぶべし!

あたしは図書室で出会ったぱんだと残りの一年を過ごそうと思いまっす!

何も無い人生なんてつまらない！  
目一杯楽しんでやるーじゃねーか！！！

## 第一話 とらとぼんだが出会いました！（前書き）

初めて書く学園ものなので自信はありませんが、少しずつ進めていきたいと思しますので、宜しく願いします！

## 第一話 とらとぼんだが出会いました！

貴方は十八歳の誕生日に死にます。

と。

五歳のころ、占い師の母に言われた。

それから、毎年私の誕生日に、母は同じことを必ず言ってきた。  
気分が萎える。

あたしはそれを信じているのだが。

だって。

「お母さんは三十四で死ぬのよー。ぼっくりねえ。」  
って、笑顔で言っていた母は本当に三十四歳で天国へ旅立った。

日付もズバリ言い当てて。

「お母さん今日死ぬから。うー。レシピあげるからね！お手製の。」とか言つて、そのまま帰ってこなかった。

気持ち悪いくらいに、母の占いは当たるのだ。

だからあたしは、悔いの残らないように十八までに出来ることは出来るだけやった。

柔道 剣道 弓道 合気道 拳法 ボクシング ムエタイ サツカ  
| 野球 バスケ バレー 卓球 水泳 テニス バトミントン  
生け花 絵画 英会話 ピアノ ヴァイオリン ダンス 演劇

小学生低学年の時はやんちゃな女の子をやってみたくて、友達ほぼ男の子。

小学校中学年の時は大人しい女の子をやってみたくて、おしとやかな友達と室内系の遊びをして、学級委員をやったり。

小学校高学年の時はクラスのムードメーカーになつてみたくて、クラスに必ず二、三人はいる目立つ女の子。

中学校の時は不良になつてみたくて髪の色をおとして、煙草（激マズ）やお酒（記憶が飛ぶ）、車やバイクに乗って喧嘩や夜遊びに大騒ぎ。

高校に入って、頭の良い子になつてみようと思って、学年トップの成績になり優越感を味わった。

しかし、中学時代のおイタが効いた。  
髪の色は戻らないし、喧嘩を売ってくる不良がめっちゃいる。  
それに授業がつまらないものだってことを知ってしまった。  
もうすぐ高校三年になるというのに。  
来年であたしは死ぬのに。  
人生が、つまらなくなってしまった。

そんなことを思う、今日この頃。

「うー。こんなとこで何してんの。」

あたしの安眠を邪魔してきたのは、一人の女子生徒。

「おう。りも。いや、少し寝てた。暖かいし。」

一月二十日。

あたしは図書室でぬくぬくと居眠りをしていた。

屋上で寝るには厳しい季節です。

うー。冬め…。

ちなみに今は授業中。

あたしはサボり。

「さぼっちゃいかんのよ?」

女子生徒は言ってくる。

いや。お前もな。

目の前の女子生徒は蜜月璃藻<sup>みつつきりも</sup>。

あたしの友達。

「サボってない。自習プリントは片付けてきた。」

「なんであんた頭いいのよ。」

「努力型だからな!。」

「明らかに天才肌でしょ。」

失敬な。

ちゃんとテスト前は勉強してるぞ。

「テスト前の十分二十分で学年トップの成績をとれる人を努力型とは言いなんし！」

りもは呆れ気味に言う。

「まあまあ。高校のあたしは成績上位を目指してんだから。ちなみにクールビューティーもなー。一匹狼！」

「それは出来てるんね。うーの中学時代は結構有名なんねし。小学校時代を見てきた私たちには変な感じするけど。」

「友達が多いけどなー。」

「広くて浅い、ね。千人くらい？」

「まさか。八百九十くらいだよ。精々。」

「あんたが言うとき多いいんだか少ないんだか分からんのよ。」

「りも、いい加減日本語ちゃんとしてくれ。」

何を言っているのかは分かるのだが、なんかもぞもぞする。

「通じればよかとね。口調はそう簡単に直らんし。」

りもは何故か誇らしげな顔をして笑った。

しかし。可愛いな。

あたしもそうとう可愛いと思うけど（うぬぼれ）、りもはあたしから見てもすごい可愛い。

黒く長い髪を後ろに垂らし、白い肌に、薄桃色の頬。

モデル体型とはまさにりもの為にあるような言葉だと思う。

ま、つまり可愛い。

超可愛い。

「うー……。目が獣じみてきてる。」

「お褒めに預かり光栄です。」

「そーね。あんたにとっちや褒め言葉かも。」  
と。

そんな会話の途中に。



「あのさあ。」

いきなり声が入ってきた。

あたしは声のした方を見る。

視界の隅でビビツて猫みたいに跳ねるりもを見てにやけながら。

そこには、一人の男子生徒。

「今授業中の筈なんだけど？」

男子はあたしに訝しむような視線を向けて言った。

「あたしのクラスは自習。暇だから図書室にサボりに来ました。現

在とあるライトノベルを読ましてもらってまーす。」

あたしは男子にあたしの眠気を誘う根源となった本を見せて言う。

「サボりって…。」

「そっちはサボりじゃない訳？」

「ちよ、うー！注意しに来てくれたんだから…。」

「いや、サボりだ。」

「ええ!?!」

「じゃあ、文句はないねー。」

あたしはその男子を眺めて、言った。

茶髪に、着崩した制服。

顔は結構イケメン。

「いや。おれの特等部屋にだれかがいたのに驚いたからさ。」

そいつは苦笑して言った。

「んー。そだね。いつも校長室にいること多いしなー。あそこ暖房

きいてるし、椅子ふかふかだし。」

ずっと校長説得して（脅して）入ってたのに、最近口うるさい教頭

に見つかったから。

立ち入り禁止になっちゃった。

るむに報告たら笑われそうだなー。

立ち入り禁止だけに。

「すげえ女…。」

「良く言われる。」

あははー。と軽く笑って、

「あんた。名前は？」

すぐ名前を訊く不良時代の癖がでた。

おおなたくまねこ  
「大錠熊猫。」

男子生徒はさらりと名乗った。

「……………。それ、本名？」

数秒の沈黙の後。

あたしは思わず聞き返した。

男子生徒はあたしみたいな反応に慣れてるらしい。

またか、といった風な呆れ顔をして、言う。

「呼ぶなら名字で呼ぶ。」

「チヨーウケる！」

あたしは男子生徒の言葉を遮って盛大に笑ってやった。

「ちょ、うー！失礼でしょ！笑わなん！」

りもが慌てた様子で言う。

あたしは面白くってなかなか笑いが収まらなかった。

「おい。気にしてんだから。」

男子生徒が嫌そうに顔をしかめて言うのを遮って、

「じゃ、ぱんだって呼ぶわ！何組？」

にっこり言う。

「んなっ…ぱんだ…。おれのことをそう呼ぶ奴は誰であろうが」

「

「いいから！何組？」

男子生徒　　ぱんだは、一瞬口を噤んで、

「二年…E組。」

渋々、といった体で言った。

「わあお。タメか。知らなかった！くまねこなんて名前のタメがい

んの。」

あたしは一通り笑って。

「あたしは、二年B組の燈虎トウコ。宜しく。ぱんだ！」  
自己紹介をした。

そうして、私たちは出会った。

ちなみに今日、あたしの誕生日。

第一話 とらとぱんだが出会いました！（後書き）

とりあえずくまねこなんて名前の奴いるか！って感じのツッコミはなしで！

ぱんだくんとうーちゃんの絡みをなるべく楽しいものにしていきたいと思います！

ちゃってんの！？と同時進行なので、更新が遅くなるかもしれませんが、宜しくお願いします。

## 第二話 青春の味！

「やつほ！」

あたしは昼休みにE組に訪れて、ぱんだを見つけて声をかけた。

「とら子……。」

ぱんだは迷惑そうに眉を顰めた。

あたしにぱんだって呼ばれるのが腹立つらしいぱんだは、あたしのことをとら子と呼び始めた。

「おー！とら子！そんな風に呼ばれるのは初めてだなあ！はっはっは。可愛らしいあだ名だなー！」

と笑ってやると、ぱんだはどうも納得のいっていない感じに、腑に落ちない表情を浮かべていたが。

「よっし、ぱんだー。ご飯食べんぞー。」

「一人で食えよ。」

「りもとー、あたしとー…ぱんだ…三人！」

「おれ買い弁だから。」

「奇遇だなー。あたしもー。よし。買に行くか。」

「……。…分かったよ……。」

ぱんだは渋々頷いてこちらに歩み寄ってきた。

「うわ、うわ…本当にきたと…おおなた殿…！」

「お前は誰だ。」

後ろで怪しい日本語を操るりもにつつ込みを入れて。

あたしらは学食へ向かう。

「目指せ焼きそばパンあーんど、コロッケパン！」

「いや。無理だろ。今からじゃ売り切れてる。」

「なっ…！嘘だー。焼きそばパンとコロッケパンは青春の味！」

「関係なくね？」

「えー…。あたし焼きそばパンとコロッケパン食べたかったのにー。」

「残念だったねー。うー、なかつたら諦めなよー？」  
「りもは可愛いなあ…。」

でも。

りもが可愛いからってパンを諦める理由にはならない。

「奪うか…。」

「止めなさい。」

「おい、蜜月…。とら子はいつもこうなのか？」

「こっつてなんだよ。失礼な。」

「うん。こんな感じ。」

「りも…。」

「お前も大変だなー。」

「でしょー？うー」といると疲れんのれー…。」

失敬な事をいう奴らである。

反撃に英語のノートのEを全てAに変えてやる。

もしかしたら気が付かないぞ。

先生に冷笑されて全て直されればいいんだー。

とか、ちっさい犯行計画を頭の中でたてたり。

購買部に到着！

「美紗さん<sup>みさ</sup>。焼きそばパンとコロツケパンあるー？」

さっそく購買の美しき美紗姉さんに尋ねてみた。

「はあ？そんな人気あるパン買いにくるならもつと早く来なさいな

…。コロツケパンは一個あるけど焼きそばパンはもうないよ。」

美紗姉さんは呆れ気味に苦笑してコロツケパンを差し出してきた。

「残念。仕方がないね。」

「仕方ないで済ませる訳にはいかない…！」

あたしはコロツケパンをうけとって、百二十円を美紗さんに渡すと、くるりと振り返る。

あたしの後ろにいた奴らが、一斉に身を強張らせた。

「う、奪っちゃいかんよー？」

「うわー…。すつげえ嫌な予感がする…。」  
「<sup>手てい</sup>もとぱんだがなんか言っているが気にしない。  
あたしは来年死ぬんだ。」

てか今日誕生日なんだからこれくらいのがままいいでしょ。  
不良時代に手に入れた笑顔で怒気をたてるというスキルを利用して。  
につこり笑顔を浮かべて。

「焼きそばパンを売ってくれないかなっ？」

背後の有象無象に訊いてやった。

「考えられねえ。」

「うっさいな。いいじゃん？」

図書室。

あたしの周りには十個の焼きそばパン。

しかも全部上納品。

ほんとに持ってこられた時には思わず爆笑しそうだった。

「うー。あんまりあーゆーことしないんだよ？」

りもが苦笑交じりに言った。

「ん…。わーった。でもさー。今日焼きそばパン食べなかったら後悔しそつだったし。後悔するのは嫌だ。」

あたしの言葉に、ぱんだがまくまくサンドウィッチを食べていた手を止めた。

ちなみに図書室は飲食禁止。

りもはそれに従って持参の弁当を開けることはしない。

良い子だなー。

「焼きそばパンごときでか？」

「来年に今日のことを思い出して、あー去年焼きそばパン食べれな

かったんだなー。これじゃ死ぬに死ねないよー、ってなりたくないじゃん。」

「死ぬなんて…。大げさな…。」

ぱんだは呆れたように言う。

ま、大げさではないんだけどさ。

「ねーえ。ぱんだー。」

「ぱんだって呼ぶな。」

無駄な抵抗だな。

「あのさあ…。」

「なんだよ？」

抵抗が無駄だということにはもう気付いていたようで、ぱんだはそれ以上文句は言わなかった。

「そのから揚げパンおいしそー。」

「お前は焼きそばパンで満足できねえのかよ!？」

心底呆れた、みたいな顔で怒鳴られた。

うっさいなー。

図書室ではお静かに。

あと、焼きそばパンで満足はしない。

結局あたしはぱんだにから揚げパンを貰った。

お返しに焼きそばパンをあげた。

「おれにくれるくらいなら返せよ…。…もらうけど。」

ぱんだはぶつくさ言っていたけれど、気にしたらキリがない。

さてと。ごちそうさま。

流石に、パン十一個は多かったかなー。

今ハードル走やったら五十メートルでも五秒はかかるかもなー。

で。

ありがとー。

有象無象さんたち…。



おかげでお腹いっぱいになりました。

## 第二話 青春の味！（後書き）

学生といったら購買！のイメージが強い不知火なのです。  
なので、二話目で早くも購買ネタをやっっちゃいました！  
うーちゃんは結構怖がられているようです。

キャラが定まっていなのはご愛嬌ということだ。（どんな愛嬌だ）

次回も宜しくです ^^

### 第三話 向かうところに敵はなし！

「帰るぞー。ぱんだー。」

「何故おれの元へくる…。」

放課後のことである。

ぱんだと帰ろうと思ったので、りもとと一緒にぱんだの元にやって来た。

ぱんだはものすごく不満そうな顔をしている。

「あたらしい仲間やうともと遊ぶのは当然だろー？」

「おもちゃって聞こえたような…。」

「気のせいだー！」

あたしは（ムカつくことに）あたしより背の高いぱんだを見上げて、笑う。

「てか、家どっち方面だよ。おれしらねーんだけど？」

「あたしもお前んち知らんからだいじょーぶ。」

「まー。とにかく分かったから。今日は帰ってやるからとりあえずネクタイを放せ。首が絞まる！！！」

ぱんだはぱんだのくせによく喚くな…。

笹喰ってごろごろしてんのがぱんだじゃねーのか。

「なんかものすごく不快なこと考えられてる気がする…。」

「おー…。勘が良いんだなー。」

「そこは否定をすることでろだろー！！」

とりあえずぱんだのネクタイを放し、教室の外で様子を窺っていたりもの元へ向かう。

「えー、と。大丈夫なのかな…？おーなぎくん？」

「まあ。帰る人いないしなー。それに女だけで帰らせんのもあれだし。」

「そっか。なら良かった…。ま、私たちだけで帰るのが危ないって

ことはないんだけどね。」

「？」

よし。帰るかー。

またかー。

不良時代の歴史は黒歴史つてやつだなー。

良い経験は出来たけど、良いことはあんまなかったし。  
現に今。

バイクに乗った不良五人に囲まれてます。

校舎から出た瞬間鉄パイプで殴りかかってくるとか。

人間じゃねえ。

「ひどらー…。今日こそ恨みを」

「五月蠅いなあ…。」

「あん!？」

やれやれ。

面倒だなー。

「おい。とら子!」

ぱんだが背後でなんか言っている。

言っておくが、心配は無用だぞー。

「喧嘩ならかかってきなよ!。」

あたしは不良たちに向かつて、余裕ぶっこいて言う。

「あらゆる格闘技の有段者であるうーさまに敵はいないのです。」

鞆を投げ捨てて、相手をさせら笑いながら見据える。

やっすい挑発に乗って、襲いかかってくるバイクの不良(男・五人)  
達を軽くいなして見せよう。

ここからは面倒なので男どもは男A、男Bで呼ばせていただく。

最初に向かってきた男Aのバイクのハンドル部に片手倒立して、男

A の頭上を軽く超えて荷台に着地。

そのまま荷台に足を引つ掛けて走るバイクをお構いなしに前へ倒れ込むと、地面に手をついて、スピードを落とすと、その勢いのまま倒立前転。

男Aはバイクから放りだされて飛んでいきました。

そのまま男Bに追突して、よろめいた男Bに男Aのバイクをプレゼント（笑）

鉄パイプを構えた男C。

まずハンドスプリングで男Cの顔面に着地。

バイクから転げ落ちた男の鉄パイプを奪い取り、勢いよく男Dに籠手をうつ。

男Dはハンドルから手を放す。

そんな馬鹿にラリアットをかましてバランスを崩させて、鉄パイプで顔面を殴打。（いたそー）

そして最後におたおたしている男Eの後頭部に鋭い回し蹴り。

あっという間に、決着はついた。

ふう、と息をついて。

投げ捨てた鞆を拾う。

ぱんぱんと埃を払って、辺りを見回す。

わぁーお。

「地獄絵図…。」

ぱんだが冷や汗を浮かべながら呟いた。

うん。

まあ、ね。

言い得て妙だよ。

あたしを中心にして、五人の青年と五台のバイクが転がっている。はたから見れば…、結構すごい図だろうなー。

ま、他人のことなんてどうでもいいけど。

「さて。帰りましょうかー。」

何か言いたそうなぱんだと、呆れ顔のりもはスルーして。

意外と家が近いことが分かったあたしとぱんだ。

りもも家が近いので、しばらく三人で帰ることになった。

くだらない会話を交わらせて、家までの道のりを進み、りもと、ぱんだと途中で別れて家に帰った。

さて。

結局、あの五人の男どもはなんだったんだ？

### 第三話 向かるところに敵はなし！（後書き）

中学時代がどんななのかが何気に気になるところです。  
うーちゃん無敵！な話でした。

次回はわんこ姉さん登場のお話です。  
宜しくです！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7971r/>

---

あたしは十八で死にますが、なんの悔いもありません...って、んなわけあるか

2011年10月8日15時44分発行